吉田有理　福島民報　連載コラム

圏外のアンテナ

［早とちり］の巻

東京メトロの明治神宮前駅。エスカレーターに乗ろうとした瞬間、２連のポスターが視界を通り過ぎた。

ロゴはＰＡＲＣＯで、写真もステキ。だが、「Ｌａｓｔ　Ｄａｎｃｅ（ラスト・ダンス）」という英文のコピーが、何だか腑（ふ）に落ちない。

今までたくさんのダンスを踊ってきた女性のみなさん、そろそろ最後のダンスを踊る時間になりましたよ、ってか？

とっさに、年齢をからかわれているような気がして、あら、失礼ね！と、被害妄想の針が震える。そのままエスカレーターでホームまで運ばれたが、やはり、どこかがおかしい。あの広告上手なパルコが、女性の気持ちを逆なでするようなポスターを作るだろうか…？

そこで、もう１度エスカレーターを下って、今度は、ギリギリまで壁に接近して、ポスターの隅々まで見る。と、右下に「渋谷パルコ８．７SUN一度さよなら。」という小さなコピーを見つけた。

あぁ、また早とちりか。

これは、渋谷パルコが、立て替えのため一時休業するというポスターだ。着々と進んでいた渋谷再開発の波が、ついに公園通りにまで及んだのだった。

パルコといえば、最上階の劇場が特長。わたしにも、小さな思い出がある。

８０年代の頭に、『下谷万年町物語』という演目があった。唐十郎主演、蜷川幸雄演出による、サイケで熱量のある舞台だったが、友人とわたしは、終演後、「よかったけど、主役の青年が、下手だったね！オーディションで選ばれたらしいけど、彼は、見込みなしだろうね！」などと、辛口のボヤキ節をまき散らしながら、公園通りを駆け下りたのだった。

それが、今まさに「王様と私」でブロードウェイの主役を張っている、俳優、渡辺謙の初舞台であった。

こちらに見る眼がないのか？はたまた、世界のケン・ワタナベが未熟だったのか？

おそらく、前者だろう。これまた、早とちりの一種だったに違いない。

残念ながら、生来のおっちょこちょいに、再開発の薬はないのである。

=２０１６年５月３日掲載=

地下鉄の駅に掲げられた渋谷パルコのポスター